



社団法人

海外と文化を交流する会

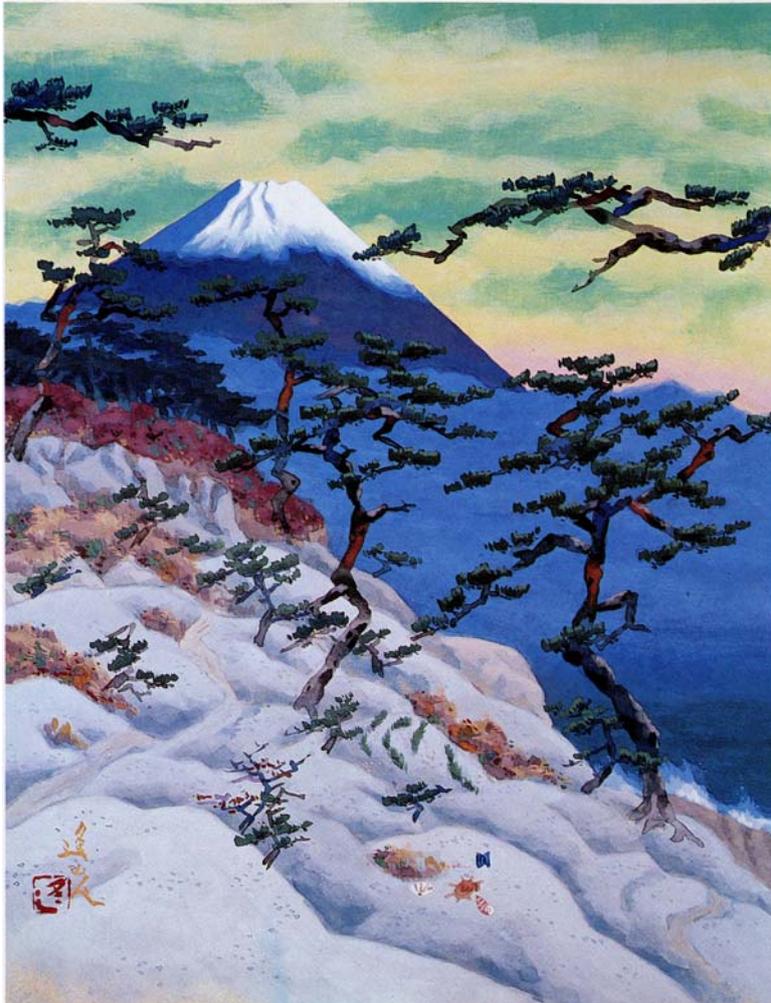
(社) 海外と文化を交流する会会報

2009年6月発行(4ヵ月1回発行)

第42号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

- 日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援
- 貧しい国々での医療活動を支援
- 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



池田遙邨 「美保の松原」
——1981年、(社)海外
と文化を交流する会が
ニュージーランドに寄
贈した日本画16点の中
の作品。池田は岡山県生
れ。幼少より画才があり、1910年大阪の天彩画
塾に入門し洋画を学ぶ。
1914年文展入選。天才少
年画家として名声。1919
年京都市に移り竹内栖

鳳に師事し日本画に転向。同年に第1回帝展入選。1926年京都市立絵画専門学校研究科(現・京都市立芸術大学)を卒業。1928年第9回帝展、1930年第11回帝展で特選。1936年～1949年、京都市立絵画専門学校助教授。1953年に画塾・青塔社を主宰。1960年日本芸術院賞。1976年日本芸術院会員。1984年文化功労者。1987年文化勲章を受章。翌1988年急性心不全のため京都市にて死去、享年92。若年より歌川広重に傾倒、広重の足跡を辿り、東海道五十三次を3度も旅した。美保の松原も東海道の名所である。

随筆・寄稿

■夕張メロン

岡田岳郎 (社)海外と文化を交流する会会員

この春、テレビニュースを見ていると、夕張の高校生が、都庁で7月から出荷される夕張メロンの予約販売を手伝っていた。修学旅行の時間を割いて、夕張の町を支えている販売の実習をしていたらしい。予約販売を初めてから15分もたたないうちに予定数を完売し、高校生は、自分達の町のメロンがどれほど魅力を持つかに、改めて気付き感動していた。

この経験により、学生達が、郷土愛について考え、或いはこれから先の人生の進路について少なからず影響を受けることだろうと思った。

その時ふと懐かしい思い出がよみがえって来た。私が大学卒業後入社したのは、浅草橋にある老舗のバッグ商社で、この会社の専務取締役との出会いが私の入社を決心する要因となった。当時私は、内定を頂きながらも最終的に会社を決めかねて、幾つかの会社を再度伺うことにしていた。

応接室に通されて私の目に入ったのは、素晴らしい薔薇の絵だった。あっと思ったが、いつか日本橋三越で中川一政画伯の個展で目にした奔放なタッチの薔薇の絵であった。あまりにさりげなく飾ってあったので、本物とは思えずじっと見ていると、専務がいきなり入って来て、絵は好きですかと一声。「はい」と返事をするやいなや、専務は社内を直接案内してくれた。営業部、経理部、総務部、デザイン部等々、部署ごとに色々の絵が掛けられてあった、それもさりげなく……。

応接室に戻ると専務は、「本物の絵を置くことは、仕事に直接関係はないんですがね。仕事の面で、なにか斬新なもの美しいものから刺激を受け感じとることが大事でね、バッグを扱っている以上使い易さは勿論ですが、美しくなければいけない。それにはね社員個々の美的感性を磨くことが大切でそういう社員をもつことが、会社の財産だと思っています。」と。その話を聞きながら胸が熱くなり他の会社をまわることを忘れていた。

そんな私が、入社するとすぐに営業部に配属され北海道地区担当になった。馴れない北海道行きは不安だったが、無我夢中で一年間道内を巡回した。一年が過ぎ周囲の状況も見えてきたころ私は、当時余り流通していなかった夕張メロンを、お世話になった方々へ送る予約をして、送る方々の中に少し迷いながら専務の名前も入れたのだった。

長い出張から帰ると、専務からの呼び出しを受け緊張してドアをノックした。深々と椅子に座っていた専務が、太めの黒縁眼鏡をかけなおして急に「君ね～ああいうことはね、当社はしなくていいんだよ、しなくていいんだ」と鋭い顔つきで言った。

あまりにストレートな言い方に「はい、すみませんでした」と言うことがやっとでひどく落ち込んでしまった。

「もうさがっていいです」の声に一礼してさがる瞬間、「でも、とても美味かったよ……美味かった」と声が掛かり、振り返ると満面の笑みで見送ってくれていた。

専務の厳しい面とやさしい面がこの時のやりとりで、じわじわと人間的な魅力となって私

に伝わって来た。経営者とはこういうものなんだなあと心に刻み付けられたひとこまだった。

経営手腕もあり、業界の人望も集めた経営者だったが、それから5年も経たないうちにすい臓がんで逝去された。

その後の経済情勢の変動により会社経営は厳しく専務の理想から離れた方向に進み、私は退社したが、この専務の言動は今でもこれから先も仕事上の師匠だと思って大切にしている。

夕張メロンの季節……私はこんなことを思い出します。

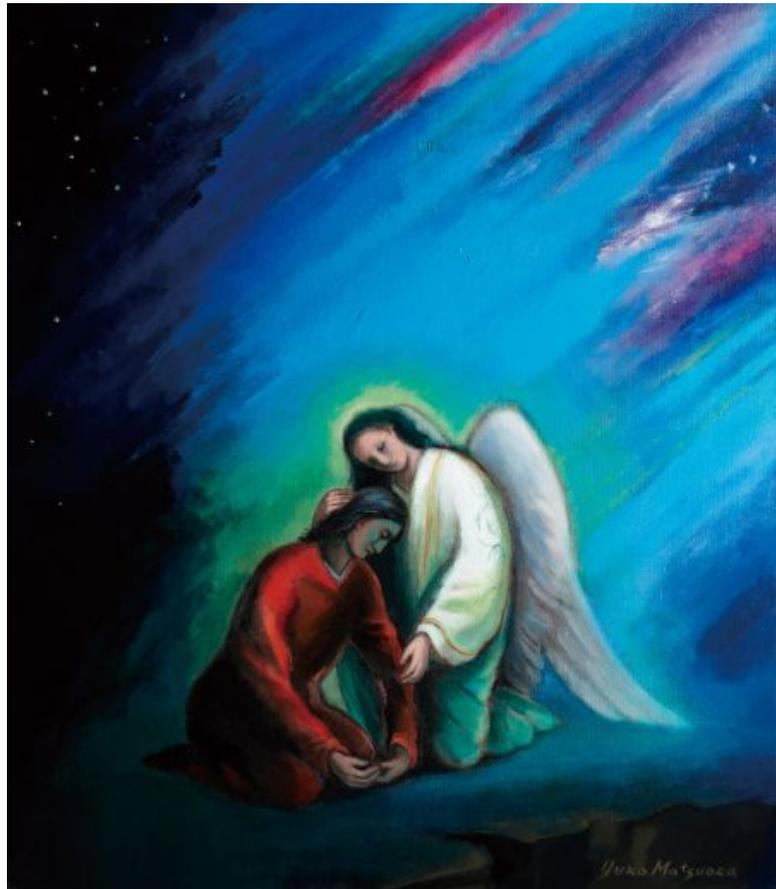
■ここから、暗闇は明け初める

横田保恵 (社)海外と文化を交流する会会友

絶壁に面した地面に、力なく座り込む、一人の赤い衣の人物。その人物の崩れかける体を自らの膝で支え、その頭と腕に手を添えて、ひざまずく、白衣の天使。二人の体から滲み出るがごとくに、やわらかな光が広がる反面、彼らからやや離れた背景には、暗い星空が広がる。ただし、彼らの背後そのものでは、濃紺の空の色が薄れ、赤い曙光が差し始めている――。

4月27日から5月2日まで開催された、松岡裕子氏の個展では、このようなモチーフの、「悲しみの世に在っても (Even Amidst Our Sorrows…)」と題された絵が、4点、展示されていた。さまざまバリエーションはみられたが、一貫して、以上の「天使と人物」の姿が提示されるものであった。

これらの絵は、その色使いの美しさや、天使の姿の優しさなどを通じ、見る者の心に、多くの思いをかきたてるものである。小文では、その中からほんの一、二点のみではあるが、



「悲しみの世に在っても (Even Amidst Our Sorrows…)」

松岡裕子・画

論じてみたいとおもう。

断崖に面した地面に、ただ、へたり込むように座る、赤衣の人物。この人物は、いったい何に直面し、へたり込んでいるのだろうか。

無軌道に、後先をも考えずに進んできた結果、断崖に面したのっぴきならない所にまで、自らを追い込んでしまったのだろうか。孤独に直面せざるをえなくなったのだろうか。それとも、断崖がそこにあることにも気づかず、よくもわるくも無邪気にそこを歩いていた結果、はずみで、誰かを谷底に突き落としてしまったのだろうか。それとも、断崖の存在に気づかずに彷徨うこの人をかばって、共にいた誰かが、身代わりに谷底に落ちてしまったのだろうか。

これらの絵は、こういった疑問に対し、直接的な答えを用意してはいない。そうではなく、ただ、崩れおちる一人の人物と、その人を支える天使の姿を描き出すのみである。「悲しみの世に在っても (Even Amidst Our Sorrows…)」というこの絵の題は、「悲しみ」の「内容」や「原因」、または「質」を問うものではない。そうではなく、「悲しみ」の存在そのものと、その中であってこそみえるもの、それを、見る者に提示しているのである。「悲しみの世に在っても」の「も」、さらには、英語の題の「Even」という言葉、それこそが問題なのである。

同時に、この絵に描かれる二人が、確固とした一対をなしているということに、見るわれわれは気付かされるだろう。同じように真ん中から長めの髪を分けた、二人。その一方の体は崩れおち、地面に膝をついている。だが、その腕に片手を添える天使は、相手が五体を地に投げ出し、ただ崩れおちるがままにはさせず、その膝でも、さらに相手の体を受けとめている。

赤衣の人物は、自分の悲しみの重さに打ちひしがれて、自分を支えることが出来ない。いや、それどころか、天使の手と膝による支えをも、意識してすらいないだろう。だが、そのように自らの重みを天使にかけているからこそ、この人物の体はきちんと支えられ、断崖にまで身を投げ出さずに済んでいるのだ。

反面、両者は、明確な差異を示してもいる。それは、赤衣の人物が打ちひしがれ、天使がそれをなだめるがごとくに、対照的に描かれている点にのみ、示されているのではない。何よりも圧倒的な差異は、両者の腕のあり方—赤衣の人物の頭を撫で、腕に手をかける天使の、手、そして腕。この手、腕は、赤衣の人物の手や腕とは異なり、閉じられていない。相手を慰め、支えるためにこそ、開かれている。動いている。だが、反面、赤衣の人物の腕は、自らの膝の前で閉じられ、誰に対しても、向けられていない。動いてすらいない。円を描いて合わせられ、動きがないままに閉じられたこの両腕の中には、だれ一人として、抱きしめられていない—いや、本来そこに抱きしめられていただれかが、永遠に失われてしまったかのようにすら、みえてくる。

この人物は、だれを失ってしまったのか。この人物は、その腕の中に、だれかを、再び抱きしめることが、できるのだろうか。この絵に描かれた天使のごとく、相手の体を、心を支えるためにこそ、自らの両腕を使う日は、この人物に、再び訪れるのだろうか—

この絵には、この問いかけに対する答えは、明確に示されてはいない。だが、われわれは、この絵を詳細に眺めるとき、この二人の姿の背後に広がる曙光が、その内に、暗い星空をも内包していることに気付くだろう。曙光は、それのみで、訪れるのではない。闇夜の中に滲み出し、それを塗り替えていく中で、曙光は、曙光となり、新しい一日の訪れを告げる。

そして、それは、「抱きしめる」という行為についても、同様なのだ。自らの愛する者を

抱きしめる時、人は、その相手を支えているのみだろうか。抱きしめている相手の重み、暖かさ、それらを通じ、抱きしめているはずの己こそが、相手の存在により受けとめられていることに、気付かされるのではなからうか。

闇夜と曙光のかかわりと同じく、抱きしめることとは、支えることであると同時に、支えられることでもある。闇夜があるから、曙光が存在する。闇夜を知っているからこそ、誰かを抱きしめ、受けとめることにより、自らもまた支えられて先に進むことが、真の意味で可能になる。

自らが直面した悲しみに打ちのめされ、崩れおちる、そのさなかにあつて、「支えられる」「受けとめられる」存在としての、己を見つめること。己の、今は空っぽの腕の中に、再び、だれかを迎え入れ、支え、支えられていくこと。受けとめる者となっていくこと。自分がおかれた闇夜の中で、天使が自分にしてくれたのと、同様に。一悲しみという暗闇は、そこにおいて、明け初める。

それは、闇夜を駆逐するものではない。だが、闇夜の存在を、相対化するものだ。悲しみは悲しみのまま残るが、しかし、それにより、われわれが闇夜に、またそこから生じる恐れや憎しみに、支配され、怖じ惑うことは減るだろう。闇夜があつても、なお、われわれには、他者を抱きしめ、また、支えられて生きていくことは、十分に可能なはずなのだ。—「悲しみの世に在っても (Even Amidst Our Sorrows…)」という、この四枚の絵に、与えられた題。それは、「も (Even)」という一語に託された希望を、これらの絵を見るわれわれに提示するものだと、いえるだろう。

—横田 保恵 (共立女子大学非常勤講師/専門分野: 英語英米文学・西洋史学)

松岡 朝を検証する—— 2

(社) 海外と文化を交流する会の創設者・松岡朝を検証することで、日本と世界のつながりを再検討できる、と考えました。前号で大谷俊介 (社) 海外と文化を交流する会常務理事が紹介記事をご披露しました。続いて、今号および次号では、佐藤純一顧問が松岡女史を考察します。

■ 「アメリカの感情」に出会って思う (その1)

佐藤純一 海外と文化を交流する会顧問

1 著書との出会い

本年平成21年2月10日の午後3時半から銀座教会で開かれた海外と文化を交流する会の定例の理事会で松岡裕子専務理事から最近全国の古書のネットで発見した私たちにとって信じられない貴重な本が入手したと、その全ページのコピーを出席者に回しながら紹介

された。それは、専務理事のご母堂で、戦前アメリカに単身渡り、日本人の女性で始めて法学博士を獲得し、戦後はこの海外と文化を交流する会を創立した松岡朝子の著になる『アメリカの感情—対日世論と闘ふの記』である。しかもタイトルは右から左書きで、光新社という出版社から昭和14年11月20日第一版発行、発行者は小川菊松となっている。

著書自身のことばによれば、満州事変から支那事変へと中国大陸での日本の戦争拡大とともにアメリカ人の反日感情悪化の一方の中で、出版の前年の昭和13年に約1年間、当時の外務省の意を受けて汎太平洋協会からアメリカの教育協会メンバーへの交流への答礼の旅ということで、アメリカ全土をめぐる、その機会に当時の日本、中国への朝子自身の思うところを延べ、またアメリカの人々の厳しい対日批判や意見を正面から聞き、反論し、また互いに認め合う努力を逃げず、誤魔化さずに行った経験をまとめたものである。

それを日本人向けに出したことが、私にとって大変注目されることと感じた。何故かという、朝子が長年アメリカで過ごしたアメリカの人々との忌憚のない話し合い、この訪問で新たに触れ合いを通して一個の日本女性として松岡自身がアメリカ人の気持ちを伝えて交流し、当時政治、軍事的な関係の悪化する一方の状況の中でも、日本人とアメリカ人が、人間と文化のレベルで接し、交流できることを訴え、伝えた意味の大きい著書だったと思う。出版当時の日本では言論、思想統制が厳しくなっていたにも拘らず、本書が出版され得たのは、サブタイトルの「対日世論と闘うの記」というのがいかにも当時の反米雰囲気にもマッチしていたことが大いに効いていたと私は感ずる。しかし実はタイトルの主部「アメリカの感情」というのは、朝子が「アメリカ人の心の奥はこうなのです、まだ理解しあっているのです。」と当時の日本の軍国政治のながれにあって、日米ののっぴきならない衝突を予感し、懸念している日本人に訴えようという気持ちが窺われてならない。いまでも朝子と出会ったアメリカ人の肉声が溢れるのを感じられる場面がたくさんある稀有の本だと思う。

2 印象的な場面のいくつか 掲載された写真から

表紙をひらいてまず目を見張ったのは、フランクリン・ルーズベルト大統領夫人の朝子宛の自署入りの実に気高い立ち姿の写真であった。この頁こそ著書のすべてを象徴的に語っていると思う。朝子が険悪になる一方のアメリカ国民の対日感情の只中に単身わたり、かつて勉学で滞在中に得た多くの知人、友人はもとより当時の教育界、さらには財界、政界の有力な人々に接し、違いは違いとしながらも考えを忌憚なく交わして歩いたときに朝子が直に面したアメリカの人々のまなざしと心を象徴すると思わせる。

さらにつづいて掲げられている晩餐会での多くの出席者の写真も、当時のアメリカ知識層、リーダー層が単身で自らの考えを話しにきた日本人女性に対する真剣な表情、姿勢と、どこか私にはそれ以後の日米関係を憂うような陰も感じられ、言葉を越えたメッセージとなっている。

今にかえって現在でも、政治、経済、外交等の現実において国家、民族全体として、国益次元でプラスとマイナス、勝った負けたを競い合う状況にあることは当時と変わらない。しかしそのような中であっても、それぞれが個人の生のレベルに立ち戻ったとき、他を思いやり「仲間になって共に生きたい」という人間本来の本能ともいえる気持ちが呼び覚まされると信じて疑わない。現実には、その人間本来のところが、共同体、社会、国家、同盟といった全体の力のはたらきに抑えられ、働かない、あるいは働けないことは今も当時とほとんど変わらないかもっと強くなっていると思うのは私だけであろうか。

しかし、朝子の著書に掲げられている何葉かの写真にある日本人、アメリカ人の出席者のそれぞれの表情、さらに交じり合って、集まってもし出される雰囲気は、当時、日本は、アメリカは、といった共同体の論理のぶつかり合いで困難な状況ではあっても、そのヴェールには写真は見られるように人間の顔をしたたくさんの人々がいたということを目のあたりにしてくれる強いインパクトをもつページとして、写真を書評の先ず第一にとりあげた次第である。
(次号に続く)

報告 & お知らせ

■平成 20 年度決算報告

(平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日)

科 目	予 算	決 算	増 減	
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①会員会費収入	550,000	445,000	▲ 105,000	
正会員会費	500,000	445,000	▲ 55,000	
賛助会員会費	50,000	0	▲ 50,000	
②事業収入	1,640,000	1,172,820	▲ 467,180	
つどい	320,000	0	▲ 320,000	
国際交流事業	0	0	0	
留学生奨励金	0	0	0	
会報発行	0	0	0	
講演会・音楽会	1,320,000	1,172,820	▲ 147,180	青盛のぼる氏コンサート
東京ハルモニア室内	0		0	
オーケストラ支援		0	0	
日本テレマン協会支援	0	0	0	
その他	0	0	0	
③補助金等収入	50,000	160,000	110,000	
補助金収入	0	0	0	
寄付金収入	50,000	160,000	110,000	
④雑収入	1,000	5,111	4,111	資産収入他
事業活動収入計	2,241,000	1,782,931	▲ 458,069	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,351,000	536,904	▲ 1,814,096	
つどい	520,000	0	▲ 520,000	
国際交流事業	50,000	0	▲ 50,000	
留学生奨励金	1,200,000	0	▲ 1,200,000	
会報発行	146,000	120,000	▲ 26,000	

講演会・音楽会	400,000	391,904	▲ 8,096	
東京ハルモニア室内 オーケストラ支援	25,000	25,000	0	
日本テレマン協会支援	0	0	0	
その他	10,000	0	▲ 10,000	
②管理費支出	650,000	915,697	265697	
法人都民税	70,000	70,000	0	
役員報酬支出	0	0	0	
諸謝金支出	230,000	170,000	▲ 60,000	
会議費支出	50,000	58,130	8130	
交通費支出	10,000	0	▲ 10,000	
通信費支出	10,000	77,876	67876	
事務所費支出	240,000	485,367	245367	
家賃	0	0	0	
水道光熱費	20,000	20,000	0	
図書・印刷費	10,000	0	▲ 10,000	
消耗品費	60,000	303,671	243671	
交際費	50,000	50,699	699	
H.P維持費	100,000	110,997	10997	ホームページ刷新
雑支出	40,000	54,324	14324	登記印誌代、監査費
事業活動支出計	3,001,000	1,452,601	▲ 1,548,399	
事業活動収支差額	▲ 760,000	330,330	1090330	
II 予備費支出	50,000	0	▲ 50,000	
当期収支差額	▲ 810,000	330,330	1140330	
前期繰越収支差額	3,686,600	3,686,600	0	
次期繰越収支差額	2,876,600	4,016,930	1140330	

■平成 21 年（2009 年）度事業計画

平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

1. “つどい”（定款 4 条 2 項による）

昨年度実行できなかった創立 40 周年記念パーティを、会員、その他 50 名の参加を目途に行い、長年支援された会員に感謝するとともに、会員同志の交流を図る。

2. 国際交流事業（定款 4 条 2 項による）

① オーストラリアに寄贈した 25 点の日本画の処遇について、日本画を管理している
ヴィクトリア州アーツ ヴィクトリアのネイション氏と連絡を密にし、2010 年 3 月前
後に渡豪し、メルボルンのナショナル ギャラリー内に常時日本画を展示するための
場所を確保することを提案する。

② オーストラリアのナショナル ギャラリーは、やはり日本画を寄贈したニュージ
ーランドの ナショナル ギャラリーやオセアニア諸国の美術館と密接に交流し、活動
を模索している。

- ③ 当会はオーストラリアだけでなく、オセアニア諸国とも美術系学生、教師の交換をすることができるよう準備する。
 - ④ この事業のためにそのために今まで繰り越して来た 120 万円に加えて 150 万円を「オセアニア美術家招聘基金」として積立て、基金に関する規約を作る。
3. 留学生への支援奨励金（定款4条6項による）
オセアニアとの美術系留学生の交換を行うための費用とする。
4. 会報発行（定款4条6項による）
会員との交流、情報交換を図るため、年間3回発行する。特に今年は当会の創設者松岡朝を学ぶ年としたい。
5. 講演会・音楽会（定款4条6項による）
11月を目標に水谷川優子（チェロ）チャリティ・コンサートを企画する。
6. 東京ハルモニア室内オーケストラ支援（定款4条6項による）
演奏ばかりでなく、種々の文化活動でも高く評価されていることを認め、支援する。

■オセアニア美術家招聘基金設立にあたって

2009年5月26日海外と文化を交流する会の総会が開催され、事業計画にもありますように「オセアニア美術家招聘基金」を創設することになりました。この基金は、かつて当会が友好のためにオーストラリアとニュージーランドに日本画を寄贈したことを踏まえて、事業をさらに発展させ、広くオセアニアの美術家を育て、日本画への関心を高めるための事業に取り組むための基金です。

規約をご覧くださいまして、ご協力、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

■オセアニア美術家招聘基金

<設立の趣旨>

当会とオーストラリア及びニュージーランドとの交流は、両国に対し、日本画壇を代表する巨匠たちの絵画を寄贈したことから本格化した。1977年に日本画25点をオーストラリア政府に寄贈（メルボルン・ナショナル・ギャラリー保管）、1981年に同16点をニュージーランド政府に寄贈（クライストチャーチ市カンタベリー博物館保管）して以来、我が国と両国との児童画交換展の開催、2006年の日豪交流年記念行事として、オーストラリア・ビクトリア州議事堂における現代日本画展の開催などを通じ、交流の実績を積み重ねてきた。

今後、日本とオセアニア諸国との文化交流を、さらに深化拡大するために、これまで行ってきた作品の交流に加え、人的交流を実施すべく、新たに、オセアニア美術家招聘基金を設けることとした。当基金は使途目的が限定されていることから、一般会計と分離し、特別会計としての運用を図るものとする。

オセアニア美術家招聘基金 規約

第1条（目的）

当基金は、オセアニア諸国から我が国に美術家を招聘し、日本とオセアニア諸国との文化交流を深めることを目的とする。

第2条（使途）

当基金の使途は、オセアニア諸国の美術家を日本に招聘するための旅費、滞在費、研修費等に充てると共に、招聘のための交渉に係る費用に充てるものとする。

第3条（規模）

当基金の規模は1000万円を上限とし、一般会計からの引当金により充当するものとする。

第4条（管理）

当基金の管理（積み立て、運用、使用）については、理事会の承認を必要とする。理事会の承認は、理事会出席者の過半数の賛同を得ることを要する。

第5条（規約の変更）

本規約の変更を行うに際しては、理事会の承認を必要とする。理事会の承認は、理事会出席者の過半数の賛同を得ることを要する。

■平成21年度予算

（平成21年4月1日～平成22年3月31日）

科 目	予算額	前年度予算額	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①正会員会費収入	500,000	550,000	▲ 50,000	
正会員会費	450,000	500,000	▲ 50,000	10000×49+5000×2
賛助会員会費	50,000	50,000	0	50000×1
②補助金等収入	50,000	50,000	0	
補助金収入	0	0	0	
寄付金収入	50,000	50,000	0	
③事業収入	1,640,000	1,640,000	0	
つどい	320,000	320,000	0	記念会費6000×50他
国際交流事業	0	0	0	
留学生交換の支援	0	0	0	
会報発行	0	0	0	
講演会・音楽会	1,320,000	1,320,000	0	4000円330枚
東京ハルモニア室内 オーケストラ支援	0	0	0	
日本テレマン協会支 援	0	0	0	
その他	0	0	0	
④雑収入	500	1,000	▲ 500	預金利息
事業活動収入計	2,190,500	2,241,000	▲ 50,500	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,966,000	2,341,000	625,000	
つどい	520,000	520,000	0	記念会費 6000×50他
国際交流事業	1,500,000	50,000	1,450,000	オセアニア諸国との交流費

留学生交換の支援	400,000	1,200,000	▲ 800,000	
会報発行	146,000	146,000	0	
講演会・音楽会	400,000	400,000	0	
東京ハルモニア室内 オーケストラ支援(会費)	0	25,000	▲ 25,000	
その他	0	0	0	
②管理費支出	820,000	650,000	170,000	
法人住民税	70,000	70,000	0	
役員報酬支出	0	0	0	
諸謝金支出	230,000	230,000	0	
会議費支出	50,000	50,000	0	
交通費支出	80,000	10,000	70,000	
通信費支出	100,000	60,000	40,000	
事務所費支出	240,000	190,000	50,000	
家賃	0	0	0	
水道光熱費	20,000	20,000	0	
図書・印刷費	10,000	10,000	0	
消耗品費	60,000	60,000	0	
H.P維持費	150,000	100,000	50,000	
雑支出	50,000	40,000	10,000	会計監査他
事業活動支出計	3,786,000	2,991,000	795,000	
事業活動収支差額	▲ 1,595,500	▲ 750,000	▲ 845,500	
II 引当金	1,400,000	—	1,400,000	オセアニア美術家招聘基金
III 予備費支出	50,000	50,000	0	
当期収支差額	▲ 3,045,500	▲ 800,000	▲ 2,245,500	
前期繰越収支差額	4,016,930	3,686,600	330,330	
次期繰越収支差額	971,430	2,886,600	▲ 1,915,170	

■会費納入のお願い

活動報告および活動予定をお読みくださって、海外と文化を交流する会がやろうとしていることをご理解いただけることと思います。

そこでお願いです。2009年度の年会費納入をお願いいたします。さらに2008年度2007年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会
 銀行振込 三菱東京UFJ銀行渋谷支店(普) 2266599 海外と文化を交流する会
 会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-27-6 ハイビル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>